

## 特集 批判的実在論研究

### 第1部 批判的実在論研究論考

### 第2部 産業社会学部創設50周年記念国際交流企画

「批判的実在論と社会科学におけるその可能性—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—」報告

## 産業社会論集「批判的実在論特集」編纂にあたって

佐藤 春吉<sup>i</sup>

本特集は、立命館大学産業社会学部の教員と院生を中心に組織され、この3年間ほど続けてきた「批判的実在論研究会」の研究活動をもとに生まれた諸成果の一部を紹介するために企画された。ここでは、第1部として、研究会メンバーによる研究成果となる各種論稿を掲載するとともに、第2部として、産業社会学部創設50周年記念にあたって本研究会が中心になって1昨年秋に開催された国際交流企画「批判的実在論と社会科学におけるその可能性—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—」で報告されたパース・ダナーマーク教授とジャン・カールソン教授によるそれぞれ2本の報告（計4本）を掲載している。

「批判的実在論研究会」の活動は、産業社会学部の教員・院生を中心に組織され、産業社会学部の研究助成を受けてすでに3年間にわたって研究会活動を行ってきた。研究会の活動は、大学院社会学研究科の「先進プロジェクト研究」とも連動しながら取り組まれてきた。また、研究会は産業社会学部以外の学部の批判的実在論に関心をもつ教員にも開かれた形で定期的な研究会を開催し、人文研の研究助成をも受けてさらに拡大した規模でも活動を展開してきた。本特集に掲載されている諸論稿はそれら

の活動の成果である。批判的実在論研究会の取り組みでは、昨年度の共同翻訳書、パース・ダナーマーク他著『社会を説明する』（ナニニシヤ書店、2015年）の刊行に次いで2番目の成果刊行ということになる。批判的実在論は、まだ我が国ではそれほど知られていないが、徐々に全国各地で関心が広がりつつあり、本研究会には他大学の研究者も関心を寄せ、時には遠路を越えて参加され、または連絡を取り合うような関係が生まれてきている。研究会としてはさらに活動を継続し、広く学外の研究者とも連携しつつ、批判的実在論の理解とその応用をめざし、研究のいっそうの進化と成果の蓄積をはかっていく所存である。

批判的実在論は、イギリスの哲学者ロイ・バスカー（Roy Bhaskar）が提唱し、独特の社会存在論にもとづく社会科学論、方法論を展開し、多分野にわたる学際的な研究をリードしている社会科学の基礎理論である。この理論を基礎として多彩な分野の有力な研究者が集まって国際的な共同研究を展開している。その研究活動は批判的実在論のための国際学会（International Association for Critical Realism: IACR）を交流拠点として、主として英語圏の諸国やスカンジナビア諸国の大学に普及し展開されている。

批判的実在論は、これまでの社会科学では正面から論じられてこなかった科学の成立根拠を問い、実

i 立命館大学産業社会学部特命教授

在論的存在論という哲学的なメタ理論を基本におく点で、ユニークである。それは、客観的実在を「超越論的推論」によって論証するとともに、世界の実在性をオープン・システムの相でとらえ、創発性と階層性という観点から多元的な複合的因果連関を考察する方法論を展開している。この考えは、必然性と偶然性の絡まりあう実在的因果連関を捉えるだけでなく、認識対象の実在性と同時に認識主観の実在性をも承認することによって、主観の因果的力を積極的に認め、概念が人間によって実践的に構成されることを主張している。これによって、対象の「存在論的実在論」と概念の「認識論的相対主義」とを同時に承認し、知識の社会的歴史的相対性を主張しながら、同時に実践的目的に適合する相対的な意味で「客観的」な知識の成立を承認することになる。科学的推論についても、「演繹」、「帰納」以外に「アブダクション」、「リトロダクション」という独自の推論の様式の重要性を主張している。また、このような考えをもとに、社会的実在の独自性格を論じ、特有の社会存在論を展開する。この社会存在論はまた、社会的実在の構築的な側面を承認するとともに、極端な主観主義的な社会構築主義を実在論によって乗り越える方向性を提示している。批判的実在論は、ヒューム主義的経験主義を徹底的に批判し、経験主義の制約内で思考する従来の社会科学の刷新を提案している。また、経験主義をもとにする、科学を法則科学と見なし科学の資格を法則に基づく予測可能性で評価する考え方に代えて、説明力こそ評価の基準であると主張し、「説明科学」を提唱している。この立場は、科学の目的は、事象連関の規則性の発見ではなく、リトロダクション的推論にもとづく創発的生成メカニズムの発見にあり、科学の資格はメカニズムによる事象生起の連関を説明することであるという科学観に依拠している。批判的実在論のこれらの特徴や方法論上の基本方向について、より詳しくは私たちが共同で翻訳した、バース・ダナーマーク他著『社会を説明する』（ナカニシヤ書店）をご参照願いたい。

批判的実在論は、ヨーロッパ諸国特に英語圏を中心に、国際的なレベルで批判的な社会科学に新たな基礎を示し、さまざまな社会諸科学の共同を促進している。この提案は、応用的で実践的な諸科学を刺激することができる可能性を持っており、経験主義の制約を超えた社会科学の発展可能性を示している。また、ポストモダニズム以来、主観主義に強い影響を受けてきた社会科学の隘路を突破し、実在論を擁護し、健全な常識に勇気を与えている。従来曖昧にしてきたこれらの問題群に果敢に切り込んで1つの理論的な基礎を提供している点で、批判的実在論から学び取るものは多いのではないかと考えられる。事実、社会と人間に関する諸問題を研究するための基礎を提供し、諸科学を総合する学際研究を刺激するという批判的実在論の性格を反映して、この研究グループには、哲学、社会学、経済学、法学、政治学、倫理学、心理学、教育学、福祉、ジェンダー、社会言語学（特に批判的言説分析 CDA）、メディア、医療、環境、国際関係論など、非常に多彩な分野の研究者が集まっている。ということで、批判的実在論は、方向喪失感ただよう現代の社会科学の学問状況においてきわめて貴重なものであり、大いに参考となる理論動向と考えることができる。

批判的実在論を提唱して、この共同研究をリードしてきた、バスカーは1昨年の11月に急逝した。しかし、IACRは、その後も活発に活動を続けており、研究成果もさらにその数を増している。バスカーの議論は非常に明晰で大胆かつ分かりやすい理論構図を提示していると同時に、細部の説明が省かれていて難解な部分や荒削りな部分も存在する。また批判的実在論に影響を受けた研究者たちの応用研究は量産されつつあるが、多彩であり、その水準もおさまぎまなものがある。その意味では批判的実在論は、まだ発展途上の共同綱領が示されている段階だといってもいいように思われる。しかし、この共同綱領で示された方向性は、さまざまな分野に応用可能であり、また学際的な共同研究の基礎を提供するものとなっており、今後さらに開拓発展させていく価値

のあるものである。その提案は、多くの示唆に富む理論的、方法論的なアイデアを刺激し続けている。批判的实在論は完成された閉じた体系になっているものではないし、大きな理論的な枠組みは共有されているが、その応用や発展については、論者の広範な自由が許されている。私たちの研究会でも、批判的实在論の考え方から学び取り、各自の研究を進化させることで、この共同綱領に基づく大きな共同研究の営みの一翼として貢献できたと考えている。また、批判的实在論は、社会諸科学を統合する学際研究に指針を与える基礎理論を提供していることから、我が産業社会学部の創設時の理念、現代化、総合化、共同化の理念の新たな活性化にとっても参照すべき重要な観点を提供してくれるものと期待される。本特集は、研究会としてはまだその初発段階のものであるが、これを契機に学部内外の、さらには全国の研究者の関心を刺激し、緩やかな共同の輪が広がることを願っている。

## 第1部 批判的实在論に関連する諸論稿について

本特集の第1部は、研究会の活動から生まれた研究会メンバー7名の論稿を掲載している。

以下に掲載する7本の論稿は、本特集のためにそのテーマを指定して原稿依頼したものではなく、各研究者がこの間の研究会活動を通じて、それぞれに関心をもって取り組んだテーマについて自由に考察していただいたものである。結果的には、研究分野の広がりや点でも研究テーマの多彩さの点でも、批判的实在論の研究の性格をよく反映したものになっている。ここで論じられているさまざまなテーマは、批判的实在論がどのような理論的、方法論的、応用的な広がりを持って議論されているのかを知るうえでのガイドともなっている。その意味で、本特集は批判的实在論のもつポテンシャルについて、読者の関心を喚起し問題意識を刺激する上で大変意義のあるものとなったと自負している。

私たちの研究会の研究はまだ出発したばかりであ

り、本特集の諸論稿も批判的实在論についての研究の蓄積、進捗の度合いはさまざまである。しかし、いずれも各自の研究課題との関係で批判的实在論との出会いが有意義であり、今後のさらなる研究深化のための確かな足がかりを築くことに成功しているといえるだろう。

以下に掲載する諸論稿は、比較的にみてより一般的な理論的・方法論的なテーマを扱っているものと、それらを応用し具体的な研究分野で社会科学を進展させようとするものとに大別できる。以下では、各論文のそうしたテーマの性格の違いによって、便宜的に、より理論的な性格のものから応用的な性格のものへという順に配列している。

理論的なテーマを中心とした論稿としては、まず中澤論文があげられる。同論文は、批判的实在論の「深さの存在論」の中心的なテーゼである存在の3つのドメイン（位相的な領域）の区分（实在世界の分化）と創発的階層（实在世界の階層化）との連関について、認識の深化と存在の生成的連関という両区分概念の位相の違い（認識深化に関連する分化と存在自体の階層化）に注目して2つの区分の関連理解を深める考察を展開している。また、そうした考察を踏まえて、必然的因果連関である生成メカニズムの発見、因果性による实在の承認とその具体的な存在の経験的検証との関連について、特にその検証または同定の基準にかかわって、明示的基準と認知的基準の関連について考察している。この考察は、錯綜していて関連がわかりにくくなっているバスキアの論述について筆者なりの検討を行う中で見いだした1つの一貫した理論的な解釈を提示するものとなっている。経験的には直感的に検証できないメカニズムや構造の仮説構成的発見とそれによる説明の妥当性の経験的テストという問題は、批判的实在論の超越論的な性格ともにかかわって論じられている重要なテーマである。類似の論点は、本特集各論考において、角度を変えて繰り返し登場する論点であり、哲学的にも方法論的にもなお深めるべき課題を内包している問題群であるといえる。

木田論文は、生成メカニズムの発見の論理として提唱されているリトロダクション (RD) の方法とその検証可能性問題に焦点をあわせているが、本論稿の独自性は批判的实在論とマルクス (主義) の方法との関係という問題に関連づけて考察している点である。本論でもその一端が紹介されているが、批判的实在論の内部およびその周辺でも、両者の関係をめぐって活発な議論が交わされている。それはバスキアの理論自身がある意味で新種のマルクス主義とでも言える性格をもっており、バスキアがマルクスの哲学思想や方法から多く学び取って新たな概念展開をはかっているからでもある。本論文では批判的实在論内部の論争に分け入って、また見田石介などの日本のマルクス主義の上向法・下向法の弁証法についての研究と RD 論との関係について考察するなかで、両者の関係について筆者なりの踏み込んだ検討をおこない、独自の理解を展開したものである。筆者は、RD に2種類のものを読み込むオリジナルな考察を踏まえ、経験的な研究と RD の方法論の有効性について検討し、批判的实在論とマルクスの方法論とのいわば接合のあり方について詳細な検討を加えている。

野村論文は、質的研究と量的研究の組み合わせを提唱している「混合研究法」の抱える困難や限界が、方法論理解の基礎となる哲学的な理解の違いにあることを確認し、批判的实在論が提唱する存在論的なメタ理論をもとに、その結合の内的な論理を解明する可能性を探っている。いわば「混合研究法」の目指す目標である方法の「トライアンギュレーション」の考え方を、批判的实在論に基づいてより確かな方向で発展させる道を探ろうというものである。その際、批判的实在論におけるメタ理論の重要性、特に「深さの存在論」、生成メカニズムと出来事との関係理解、経験的事実の意味などの理解が重要となる。本論文でも、こうした理論の基本的な考え方について筆者なりの問題視角から詳しい考察を加えている。また、深さの存在論をもとにした発見の文脈と正当化の文脈の区別と組み合わせという視点の

重要性、研究における問いの重要性などを踏まえて、ダナーマークらが提唱する用語法によって、インテンシヴな研究とエクステンシヴな研究のトライアンギュレーションの新しい展開方向を示唆している。従来批判的实在論は、発見の論理の相対的重要性の観点からインテンシヴな研究を重視する傾向があったことから、エクステンシヴな研究の活用とトライアンギュレーションの具体的な研究を進展させる点で相対的に弱い傾向がある。野村論文は、そうした研究の展開に向けた予備的な考察という性格のものであるが、今後の進展が期待される。

加藤論文は、批判的实在論研究グループと密接な交流をもち、マルクス主義政治学 (国家論) の理論を牽引してきたとも言えるボブ・ジェソップが提唱する政治分析の方法論「戦略・関係アプローチ」について、同種の問題領域での議論展開の状況を鳥瞰したうえで、批判的实在論のストラクチャーとエージェンシーの関連理解がもたらした影響について確認している。また、ジェソップのアプローチと、バスキアの「形態転換モデル」やアーチャーらの主張する「形態生成論」との関連について比較検討を行っている。筆者は、ジェソップが資本主義国家論の研究者であるだけでなく、その政治分析の方法論の探究から分かるように、社会科学のメタ理論の展開を目指すより大きな視野を持った理論展開をはかっていることを強調する。そのうえで、ジェソップの「戦略・関係アプローチ」と批判的实在論の分析モデルとを総合し、行為者 (エージェント) の主体性や彼らの抱くアイディア (理念または観念) の役割についてさらに重視した理論の開拓の必要性を示唆し、1つのモデルを提案している。

大月論文は、80年代に生じた社会研究への関心の高まりを反映したいわゆる「文化論的転回」以降のさまざまな文化研究の流れを概観したうえで、今日の文化研究が、経済や社会構造といった問題から遊離した観点を強化し、それらとの関係が不明確になってきている問題状況を描き出している。アレグザンダーらのカルチュラル・ソシオロジーはそうした

傾向を推し進めている。イーグルトンは物質的なものの重要性を強調して、こうした傾向に反発を強めている。文化的なものや社会構造や経済的なものとの間の有機的な関係をとらえることの必要性を唱える潮流もある。筆者は、この双方の視点を有効に結びつける文化理論の展開方向を、批判的实在論のメタ理論の応用可能性としてとらえている。特にアーチャーの構造とエージェンシーの連関把握および社会構造と文化構造の連関把握についての提案の応用可能性について検討を加えている。批判的实在論は、客観的な社会構造と同時にエージェンツの主体的な存在論的位置をそれぞれの創発特性としてとらえている。こうした点から、批判的实在論は文化研究の方法を支えるメタ理論として有望だといえる。大月論文では、こうした可能性と方向性を確認している。具体的な研究のなかで、そうした理論を応用展開する研究は自身のこれからの課題としている。

中村論文は、自らの研究領域である、心理・社会臨床研究において、社会構築主義の理論が活用されている数多くの場面や研究状況を取り上げ、その有効性および問題状況との親和性について詳論している。特に、社会問題研究やナラティブセラピーにおける社会構築主義の有効性について、その「臨界点」にまで検討を深め、その意義を確かめながら、しかし、社会構築主義がさまざまな難点や問題点を孕んでいる事実と向かい合う。本論は、こうした臨界点において現れる限界やほころびをどのように超えていくか、という視点を据えたうえで、きわめて慎重な姿勢を取りながら批判的实在論の可能性について検討している。批判的实在論と社会構築主義というテーマは、社会分析のためのメタ理論の開拓を目指す批判的实在論にとっても、理論的にも応用研究においてもつとに重要な論題になっている。中村論文は、これまでの研究実践と暴力臨床に現れるサイレンシングといった、現場で直面している具体的な問題状況のなかで思考したものとして貴重な問題提起になっている。

松田論文は、健康と、所得、教育、人種、福祉や

貧困といった社会的諸カテゴリーとの関連を探る社会疫学の研究分野で、批判的实在論という哲学的観点を導入する研究が試みられていることを紹介している。本論文では、ジョン・イーストウッド（John G. Eastwood）の提案する「批判的实在論を用いた疫学研究プロトコル」の概略が紹介解説されている。イーストウッドにおいては、経験主義の限界を超える必要性が確認され、3つのドメイン、創発、アブダクションやリトロダクションといった推論の重要性を踏まえて、創発的理論形成、確証的検証、アブダクションとリトロダクションによる説明的理論形成という3つの段階の研究フェーズと、それぞれにおける研究手法の組み合わせ（トライアングレーション）などについて興味深い提案がなされている。また、イーストウッドの研究では、シドニー南西部の「産後うつ」についての具体的な社会疫学的な調査研究の事例に即して検討されており、その詳しい紹介もなされている。その研究においては、エクステンシヴな統計調査なども巧みに用いながら、インテンシヴな研究とエクステンシヴな研究とが組み合わせられている。この研究から、批判的实在論が実在的な因果連関の把握のために柔軟な形で応用され研究過程を方向付け、また研究成果を評価するために活用されていることが分かる。また本論では、筆者の視点から、こうした研究は未だ開拓途上であり、いくつかの点で理論的な整理を必要とする諸問題やいっそうの明確化を必要とする諸課題が存在することも指摘されている。社会疫学研究といった分野でも批判的实在論の応用可能性が生き生きと示されていて大変有益な論考となっている。

## 第2部 産業社会学部創設50周年記念国際交流企画「批判的实在論と社会科学におけるその可能性—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—」について

批判的实在論研究会では、2014年11月に産業社会学部の創設50周年記念の学術企画の一環として、上

記の国際学術交流企画を行った。本企画は、研究会メンバーによって訳出作業を進めていた批判的实在論とそれにもとづく社会科学方法論についての優れた解説書 Berth Danermark, Mats Ekström, Liselotte Jakobsen, Jan Ch. Karlsson, *Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences*, Routledge, first published in English. 2002の著者の二人、バース・ダナーマーク (Berth Danermark)、氏とジャン・Ch. カールソン (Jan Ch. Karlsson) 氏をお招きして開催したものである(同書は、昨年3月に本研究会のメンバーの手で翻訳刊行されている。バース・ダナーマーク、マッツ・エクストローム、リセロッテ・ヤコブセン、ジャン・Ch. カールソン著、佐藤春吉監訳『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論—』ナカニシヤ書店、2015年)。

なお、バース・ダナーマーク氏は、スウェーデンのオレブロ大学、健康医療科学部の社会学教授で、障害研究・障害福祉研究の分野ではスウェーデンの第一人者の一人である。彼は、スウェーデン障害研究所のリーダーとして大きな役割を果たしてこられた。社会学や社会科学論にも造詣が深く、スカンジナビア諸国への批判的实在論普及の第一人者ともいえるであろう。ジャン・Ch. カールソン氏は、スウェーデンのカールシュタット大学労働生活科学部の社会学教授で、労働、労働組織、日常生活における階級とジェンダーなどについて研究してこられたベテラン研究者である。社会学理論や社会科学論にも関心を持ち、批判的实在論を応用した研究を精力的に進めている。

この学術交流企画は、二人の講師に、著書『社会を説明する』の内容に関わらせて批判的实在論の基本的な考え方、その学際研究の基礎としての理論的可能性について講演していただいた。批判的实在論についての認識を共有し、共同討議の機会を設けるという趣旨で、2014年の11月6日(木曜日)と7日(金曜日)の両日連続で開催された。当日はお二人に1題目ずつご報告いただいて質疑と討論をおこなった。したがって、2日で計4つの報告をしていた

だいたことになる。本特集では、お二人のそれら4本の報告を掲載している。なお、質疑や討論の詳細を報告することは誌面の都合もあり残念ながら割愛せざるを得なかった。

開催日程やスケジュールの詳細は以下の通りである。当日の案内書をもとに紹介しておく。

産業社会学部創設50周年記念学術企画

産業社会学部・人文科学研究所「批判的实在論研究プロジェクト」共催

「批判的实在論と社会科学におけるその可能性—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—」

バース・ダナーマーク (Berth Danermark) 氏 (社会学; スウェーデン, オレブロ大学, 健康・医療科学部教授)

ジャン・Ch. カールソン (Jan Ch. Karlsson) 氏 (社会学; スウェーデン, カールシュタット大学, 労働生活科学部教授)

招聘 二日連続講演 (二日とも通訳あり)

11月6日(木) 15:00~18:00 末川会館第3会議室

B. ダナーマーク 「批判的实在論への導入」

J. Ch. カールソン

「社会構造と人間エージェンシー」

11月7日(金) 15:00~18:00

末川会館第3会議室

J. Ch. カールソン

「批判的实在論; その研究手法と研究デザイン」

B. ダナーマーク

「批判的实在論応用のためのガイドライン」

司会: 佐藤春吉 (立命館大学産業社会学部教授 [当時])

松田亮三 (立命館大学産業社会学部教授)

なお同企画は、1日あたり50名ほど、延べでは100名を超える参加者があり、報告も議論も活発に行われ成功であった。なかには、東京や金沢、大阪、神戸などからも研究者が参加され、これを契機に新

しい研究交流の芽も生まれた。批判的实在論を主題とした国際的な研究交流の機会は、日本ではこれからはじめてであったと思われる。今後ともこうした国際的な交流がさらに発展することを願っている。

なお、2人の講演は英語で行われたが、その報告原稿は事前に翻訳し、来場者には英文と日本語訳の双方を参照できるように資料を用意した。また、質疑応答の大部分は基本的に通訳を介して行った。以下に掲載する報告は、その原稿にもとづいている。以下、各報告について簡単なコメントをしておく。

1. 第1日目の第1報告、パース・ダナーマーク教授の「批判的实在論への導入」は、批判的实在論の理論構図を構成している主要概念を簡潔に分かりやすく説明している。その内容は基本的に著書『社会を説明する』で書かれているものと重なるものである。科学は概念から出発している。科学の対象は客観的实在性をもつが、科学は主観的な概念を形成加工する営みである。したがって、概念と実在的对象との関係理解が重要になる。实在論では、科学が扱う「事実」はすでにして理論依存的であることを承認するが、それはしかし、理論決定的ではない。つまり対象の实在性に関係なく主観的な概念や理論がすべてを決定しているのではないと考える。科学の対象は、意識から独立の客観的な実在物であり、すなわち自存的 (intransitive) なものであるが、科学はこれを主観的に構成された概念や理論を通じて把握する。科学的な認識は理論依存的および概念依存的なものであり、その意味では主観的なものである。人間の意識的な生産物である理論や概念は科学にとってそれを生産し加工する対象であり、これは意識に媒介されていると言う意味で意存的な (transitive) なものである。科学は意存的対象の形成を通じて自存的な対象に迫る営みであるということになる。批判的实在論は極端な相対主義に陥らずにこのふたつの対象の関係を扱うことができる。

本報告では、客観的实在性について論証するために批判的实在論が提唱する超越論的な問いについて論じている。その際重要となるのが、科学と实在の

関係を把握するための存在論な問い：「科学の存立が可能であるためには、实在はどのようなものでなければならないか」である。この間には、実験科学の分析で答えることになる。この分析から、实在への実践的介入の重要性、实在対象の独立自存性、直接的な観察をこえる力やメカニズムの存在、などが導き出される。ここで、経験のドメイン、アクチュアルなドメイン、リアルなドメインという世界の3つの存在位相の領域区別の重要性が説かれる。こうした議論をもとに、批判的实在論の深部のメカニズムの存在と出来事や経験的に観察されていることとの違いと相互の関係理解が、科学の仕事であるとして強調されている。また批判的实在論の概念についての理解、因果性や創発性という考え方、世界の階層的なあり方についての理解の重要性などが主張されている。これらはいずれも批判的实在論の思考を支える世界理解の基本図式となっているものである。

2. 第1日目の第2報告、ジャン Ch. カールソン教授の「社会構造と人間エージェンシー」は、社会学の根本問題ともいわれる構造とエージェンシーについての批判的实在論による関係理解について解説している。社会構造は实在しているのか、それは観察可能な個人の行為とどのように関連しているのかという問題である。構造のみの实在性を主張する方法論的全体主義と個人の諸行為のみが実在的であると主張する方法論的個人主義の対立を批判的实在論はいかに乗り越えるのが中心的なテーマである。ここでのカールソン氏の説明は、R. バスカーの「社会的行為の形態転換 (transformation model) モデル」とさらにそれを発展させた M. アーチャーの分析的二元論による「形態生成論 (morpho-genesis) モデル」によっている。要するに、一方のみの实在性を認め他方をその付随現象と見なして一方に吸収してしまう合成論の批判と乗り越えである。方法論的全体主義の下向的合成論や方法論的個人主義の上向的合成論に対して、ギデンズは双方の対立を乗り越えると称する構造化理論を提唱したが、批判的实在論はこれを双方の対立を中間概念としての構造化の実

踐に吸収してしまう。これでは、双方の实在性を十分扱えないという意味で、この立場を新たな合成 (conflation) 論、中心的合成論であると批判している。これにたいして、双方の实在性を承認しつつ相互の連関をとらえる方法を批判的实在論は提供できる。その最初の理論化の試みが R. バスカーの形態転換モデルである。また、これを補足する形で、分析的二元論の考え方を明確にし、時間次元を組み入れた形態生成論モデルを提案したのが M. アーチャーである。この報告では、これらのモデルについて分かりやすく説明され、批判的实在論による社会科学における行為 (エージェンシー) と構造の連関把握の基本構図が示されている。

第2日目第3報告は、カールソン教授による「批判的实在論：その研究手法と研究デザイン」である。この報告は、カールソン教授とステファン・アクロイド氏の共著論文をそのまま利用してなされているものである。本報告の主題は、批判的实在論を応用した特に経営組織研究を中心とする具体的な調査研究の手法と研究デザイン (研究についての戦略的な枠組み) についてである。特に批判的实在論に明示的な指針を求めないままで現在なされている研究も含め、さまざまな事例研究の類別化を行い、その批判的实在論的な位置付けと評価、発展可能性を論じたものである。本報告は、『社会を説明する』において論じられていることがらを超えて、批判的实在論にもとづく調査研究、特にインテンシヴな事例研究についての考え方、およびそれらとエクステンシヴな調査研究との結合のあり方に論じて興味深い論考である。ここでの中心的な議論は、实在論的な研究デザインの8つの分類によるそれぞれの調査研究の特徴付けとその可能性についてのものである。本報告では、最初に实在論的な社会科学的調査研究において注視すべき点、特にその研究の目的が、現象の根底に働いているメカニズムとその発現の過程とを明らかにするという点が強調されている。しかし、メカニズムは直接的に観察できないのであり、アブダクションやリトロダクションという思考

操作が重要になる。さらには、メカニズムはその発現のための環境条件すなわちコンテキストの影響を受け変化する。したがって研究ではメカニズムの発見と同時にコンテキストの理解が重要になる。というわけで、調査研究においては、メカニズムとコンテキストの相互影響関係の把握が中心的な課題になるのである。その点では、事例研究 (case study) が非常に重要かつ本質的な意味をもっているという主張がなされている。また、批判的实在論は方法論的多元主義を主張し、利用可能な研究手法は何でも利用するという方法論的態度をとる。これは折衷主義ではあるが、無原則なものではなく批判的实在論による批判的評価を踏まえたものである。とはいえ、批判的实在論がより重視し頻繁に利用する手法というものもある。

報告では、こうした批判的实在論の基本的な観点を踏まえて、これまでの研究を8つの種類に分類し、そのそれぞれの研究事例を紹介しつつその特徴点について論じ、その可能性について考察している。この類型区分の基準にも批判的实在論の考え方が応用されている。それは、よりインテンシヴな研究かよりエクステンシヴな研究かという基準軸と、対象に距離を置く研究か、対象に積極的に関与する研究か、という軸である。前者の軸 (インテンシヴ対エクステンシヴ) には、研究の論理がリトロダクション的かアブダクション的かという副次的な軸が重なっているとしている。こうした分類軸を基準に、本報告では、「距離を置く研究」という大枠のなかに、「事例研究デザイン」、「比較事例研究」、「生成的制度調査」、「大規模な量的データセットを利用するデザイン」が分類されている。そこでは、それぞれについてその事例にそくしてその特徴と可能性が論じられている。それぞれの研究デザインの内容的な議論は、興味深く学ぶところが多いが、ここでは割愛せざるをえない。さらに、報告では、もうひとつの大きな区分、「関与的研究を含むデザイン」があげられている。この分類枠組みの中には、アクション・リサーチ、インテンシヴな实在論的評価、素足の研究、



エクステンシヴな实在論的評価、が同じく事例を紹介しながら、それぞれの特徴とその可能性とを論じている。ここでも、その詳しい内容紹介は割愛する。しかしここでは、批判的实在論の特徴として、アクション・リサーチなどの関与的な研究に大きな可能性を見だし、大区分のなかでその可能性について詳細に語っている点が特徴的である。その背景には、批判的实在論が、社会的世界の諸問題の解決を、すなわち改革の実践に積極的に関与することを科学的開放的な役割として位置づけていることがある。批判的实在論を現実の社会における科学的実践としていかに生かしていくか、この点が問われているのである。

2日目の第4報告、ダナーマーク教授の「批判的实在論による応用研究のガイドライン」は、批判的实在論を具体的な研究に応用するための基本的な考え方について解説したものである。冒頭、社会現象の複雑性という問題にどう切り込んで行くのか、そして社会科学は個別の観察を超えてより一般的な知識を構成する必要があるが、それはいかにして可能か、という2つの難問が提示され、それらの問題について考察するとされている。ここでの議論の主題は、1つは、社会がオープンシステムであり、それゆえ、社会現象は、さまざまなメカニズムが関係しあう複雑性をもっているということである。だから社会現象は、構造やメカニズムの特定だけでは説明できず、それに加えて諸メカニズムの組み合わせや相互影響関係をとらえることが重要になる。この複雑性はしかし、ただ乱雑であるということではない。ここで、批判的实在論のメタ理論である、世界の3

つのドメイン（エンピリカル、アクチュアル、リアルという存在位相の区別）、そして生成メカニズムの創発性と階層性、という理論的な世界理解が重要な意味を持つてくる。報告では、この存在の位相性、階層性の理解が学際研究にその指針を与える点について論じられている。

また、本報告では、もうひとつの問題、社会科学研究が一般的な概念や知識を獲得する必要性に関連して、批判的实在論が提唱する4つの推論様式の意義とその概略について論じている。ここでは、科学論上多くの議論を呼んできたいわゆる帰納や演繹の限界にまつわる科学研究における推論の妥当性の問題について論じている。特に批判的实在論の新たな提案について、これまでよく知られた演繹と帰納以外に、アブダクションとリトロダクションという2つの推論様式を加えていることの意義について詳論されている。アブダクションとリトロダクションは、批判的实在論の専売特許ではなく、Ch. S. パースが提唱したものであるが、批判的实在論があらためてその意義を深め实在論的な科学研究のための推論として位置付け直したものである。

本報告では、こうした問題についての批判的实在論の基本的な考え方を紹介しながら、さらに、方法論的なガイドラインを10項目に整理して示している。ここでも、その詳論については割愛せざるを得ないが、これらの提案はいずれも批判的实在論の科学方法論にとっては基本的な考え方であり、これらの提案とその背後にある世界理解について理解を深めて各自の研究に生かしていくならば、実り多い成果を期待できるのではないだろうか。